

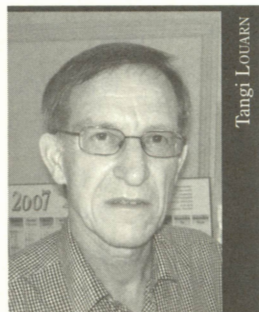
LES FACTEURS CULTURELS DE LA REVITALISATION RÉGIONALE EN BRETAGNE

ブルターニュにおける 地域活性化の文化的要因

Tangi LOUARN

タンギ・ルアルン

[プロフィール]——1947年、パリに生まれる。家庭ではブルターニュ語が使われていたので、幼少時よりブルターニュ語とフランス語のバイリンガルという環境で育つ。小学校はブルターニュ北部ブルエゼックにあった当時としては珍しいバイリンガル学校に通う。いわゆる「68年世代」で、学生時代はさまざまな運動にかかわる。大学で経済学を専攻後、労働省の外郭団体で労働監査、労働条件視察など多くの分野で活動。その一方で、「スコール・アン・エムザオ」Skol anEmsavの設立など、少数言語の復興を目指す運動に参加。1977年にはバイリンガルの私立学校「ディワン」Diwanの設立にもかかわる。1979年設立のブルターニュ革新派文化戦線書記長、1996年から2010年まで、カンペール文化センター長。2005年から現在まで、欧州少数言語事務局フランス支部長を務める。ブルターニュ文化審議会人権委員会および対外関係委員会委員長。著書に、『ディワン——ブルターニュの公立学校』、『フランスにおける地域語と少数言語』、『フランスと文化的人権の否定』などがある。



Tangi LOUARN

I. はじめに：今日のブルターニュ

まず簡単にブルターニュの紹介からはじめましょう。

ブルターニュはフランスの西端に位置しています。北はヨーロッパ大陸と大ブリテン島との間に横たわる英仏海峡に面し、西は大西洋、南はガスコーニュ湾を挟んでイベリア半島と接しています。ブルターニュは、はるか昔にできた

アルモリカ山塊の西に位置しています。

面積は3万4,023キロ平米、人口およそ450万人。これはヨーロッパでいえば、国土面積3万2,000キロ平米のベルギーより少し大きいくらいです。日本でいえば、四国の倍くらいで、宮崎県を除いた九州と同程度の大きさです。人口はおよそ450万人。ベルギーの人口の半分程度です。

ブルターニュは、9世紀から10世紀にかけて、つまり851～936年までは王国でしたが、その後、独立の公国となり、フランス王国に併合されたのは、1532年になってからです。しかも1789年にフランス革命が起きるまで、ブルターニュは自治領でした。ブルターニュに住んでいる人々をブルトン人と呼びますが、そのブルトン人たちは絶対王政に反対して、フランス革命で重要な役割を演じました。しかし、この革命によって、ブルターニュの自治権は失われ、ブルターニュは完全にフランスの一部として、1,000年前に遡る古い分け方を踏襲して五つの県に分割されてしまいます。

現在、ブルターニュでは、漁業、農業、食品加工業が盛んです。漁業に関してはフランスで最も盛んで、農業とその関連産業は、国内総生産の40%を占めています。

ブルターニュは、エレクトロニクス産業と電気通信の分野でもとても重要な地域で、アメリカ大陸とヨーロッパを結ぶ衛星通信の最初の中継基地が、このブルターニュに置かれました。自動車産業に関しては、プジョー・シトロエン社の工場があるほか、ポロレ社の存在が光っています。ポロレ社は、ブルターニュで製造されたりチウム・イオンバッテリー技術をベースに、「ブルーカー」という電気自動車を開発し、2011年のパリ市の電気自動車市場を賑わせたばかりです。また造船業では、豪華客船「クイーン・メリー2世号」の建造で知られるシャンティエ・ドゥ・ラトランティック社がロシアから軍艦2隻の建造を受注しました。さらに、従業員数1万5,000人、世界に23万のフランチャイズ店を擁する、大手化粧品会社のイヴ・ロシエ、従業員数2,700人のテレビ・ゲーム会社、ユビソフトといった主要企業もブルターニュに拠点を置いています。ユビソフトは、マイクロソフトのパソコン・ゲームでは、フランス国内の大手スーパーでほぼ20%のシェアを確保しています。

ブルターニュでは、『テレグラム』と『ウエスト・フランス』という重要な新聞が2紙発行されており、特に『ウエスト・フランス』は、日刊紙として国

内最多の発行部数を誇ります。ブルターニュはまた出版業についても、フランス第二の地域です。

優秀な若者は、パリ首都圏、あるいは米国などで仕事を探すため、ブルターニュからの人材の流出は止まりません。しかし、地域内に強い産業を抱えているおかげで、ブルターニュには毎年2万5,000から3万もの新しい住民が移住してきています。

こうした地域の経済的再生に、文化的あるいは社会文化的な要因は、どのようにかかわっているのでしょうか？ いくつかの歴史的経緯を振り返りながら、地域再生のさまざまな側面、そしてそれを阻むリスクを明らかにしてみましょう。

II. 歴史的経緯

ブルターニュ (Bretagne) という地名は、おそらく、プレタニー (Pretani) という言葉から来ているのだと思われます。このプレタニーは、もともと英語のブリタニー (Brittany)、つまりブリテン島もしくは現在の大ブリテン島をさす、ブリタニア (Brittania) の語源となった言葉です。

現在のブルターニュが誕生したのはローマ帝国末期で、ローマ人たちはこの土地を「アルモリカ」(ブルターニュ [ブレイス、ブルトン] 語で「海の国」の意) と呼びました。

そのころ、アルモリカにはケルト人が住んでいました。ケルト人というのは、紀元前2世紀からローマ帝国の拡張期まで、数世紀にわたってヨーロッパ全土を占領していた民族です。彼らはひとつの言語、今日「ケルト語」に分類される共通の言語を話していました。ケルト人はひとつの政治的なまとまりをつくることはありませんでしたが、ドルイドという精神的指導者によって導かれる共通の文化を有し、同じ宗教を信奉することによって互いに結ばれていました。

ケルト人たちが来る前は、別の民族がこのブルターニュの地を支配していました。いまに残る数々の巨石はその遺構で、もっとも古いものは、エジプトのピラミッドが建設された時代からさらに2,000年も前に遡ることができま

す。これらの巨石には、ブルターニュ語で「石のテーブル」を意味するドルメン、「長い石」を意味するメンヒル、ゲール語で「石の山」を意味するケルンなどがあります。バルヌネスの石塚は、紀元前4,600年につくられました。ブルターニュで見つかった人間の形跡でもっとも古いものは、最近西端部で発見された焚き火の跡で、なんと紀元前46万5,000年もの昔に遡ります。

ローマ人による占領とふたつの文化

ブルターニュは5世紀ものあいだローマ人によって支配されていました。それはユリウス・カエサルが、いまのブルターニュ南部で、アルモリカのケルト人ヴェネト人と海戦を行って勝利した紀元前56年から、ローマ帝国が崩壊した476年までの期間に当たります。

ローマ人たちは征服した土地を支配し、現地の指導者階級の人々にラテン語とラテン文化の受容を強要しました。けれども、ブリテン島とブルターニュに住む人々は、ケルト語を使い続けました。特にブルターニュ半島の西部がそうで、それに対して東部では大幅にラテン化が進みました。

ローマ帝国に支配されているあいだも、英仏海峡を挟んでのブリテン島とブルターニュ半島の交流は、決して途絶えませんでした。ローマ帝国の勢いに翳りが見え始めた時期、ブリテン島のケルト人たちは、共同体単位で次々と海を越えてブルターニュ半島に移住し、現地化します。レオン・フルリオ教授はその著『ブルターニュの起源』のなかで次のように断言しています。「大昔、英仏海峡に隔てられた二つの土地は、同じ一つの文明を形成していた」と。舟を漕いで一日で行き来できる、海を挟んで向かい合う二つの土地は、ローマの支配によって帝国のなかで一つに結ばれていたのです。

このときからブルターニュには、二つの文化が育ちました。それが西のケルト文化と、東のラテン化された文化です。

III. ブルターニュの経済的・文化的再生

ブルターニュは1532年の条約でフランスに併合されますが、当時のブル

ターニュはその豊かさで名高かった南米の土地と比較され、「フランスのペルー」と呼ばれていました。この15世紀末から17世紀半ばまでが、ブルターニュの黄金時代です。経済的に自立していたこともあって、繁栄をきわめていました。当時つくられた2,900棟の建造物が、歴史的遺産として、いまに伝わっています。遺跡の多さという点では、ブルターニュはパリのあるイル・ド・フランスに次ぐフランス第二の地域です。

けれども、たびかさなる英仏戦争、次いでナポレオン戦争のせいで、ブルターニュはすっかり荒廃してしまいます。そこにさらに第一次世界大戦が追い討ちをかけます。

そのなかで、ようやく1950年代の始めに、ブルトン人たちが集団行動の大切さを自覚することで、ブルターニュは復興を始め、その復興はさまざまな分野に及ぶ包括的な現象として広がり、大きく発展していくこととなります。

1) CELIBと経済復興

こうした集団としての自覚は、強いアイデンティティを背景に、まず経済の面で発揮されます。

第二次世界大戦ののち、フランスの中央集権的な国家制度の一部となったブルターニュは、政治的決定権もなく、あらゆる面で大きく遅れていました。道路も電話も電気も上下水道もほとんど整備されておらず、農村人口の50%が弱小産業に従事するか、さもなければ貧困にあえいでいました。他方、大量の人口が持続的に流出し続けていました。

そこで、1950年代にブルトン人は団結します。市町村議員、経済のリーダー、組合の幹部たちが一丸となって、CELIB（ブルターニュ地域振興連絡委員会）というひとつの組織のもとに集まったのです。議長は、ブルターニュ出身の代議士で大臣のルネ・プレヴァン。委員会の目的は、道路封鎖、県庁の占拠など、農民一揆のような動きを起こして、フランス政府にブルターニュの発展計画を要求することでした。この運動は、フランスの地方分権のさきがけとなり、国にさまざまな事業計画を受け入れさせたのです。たとえば、高速道路の建設、イギリスへ農産物の輸出を可能にする大規模港湾の北部沿岸への建設、農村部における早急な電化の実現、電話網の敷設、また特にエレクトロニクス分野で

の企業誘致です。ブルターニュ北部の農業協同組合は、地方と県の助成金を得て、独自の海運会社「ブリタニー・フェリー」を設立しました。「ブリタニー・フェリー」は、現在、2500人の従業員を抱え、ブルターニュ、イギリス、フランス、そしてスペインにもフェリーを運行させ、トップクラスの企業に成長しています。

もともと、農業協同組合がこのような経済発展を実現できたのは、「ブルターニュで暮らし、働く」という、強い地域アイデンティティを持っていたからでもあります。こうした強いアイデンティティは、他の企業経営者たちにも共有されていて、彼らがブルターニュに会社を設立する原動力となっています。

2) 堅固に組織された団体活動による文化の伝達

さて、文化面ではどうだったでしょうか？ これも第二次大戦後、それまでばらばらだった諸団体が、大きな連盟へとまとまってきました。

ブルターニュ音楽と「ボダデク・アル・ソネリオン」(bodadeg ar sonerion、音楽家の会)

第二次世界大戦後、ブルターニュの伝統音楽を守りたいと考える人々が、「ボダデク・アル・ソネリオン」、すなわち「音楽家の会」(ブルターニュの音楽家は「ソネリオン」、つまり音を出す人と呼ばれます)を結成しました。ブルターニュの伝統的な楽器は「ビニウー」というバクパイプ、そしてオーボエのような音を出す「ボンバルド」です。当時、こうした楽器を演奏していたのは、少数の年老いた音楽家たちだけでした。「音楽家の会」の動きは、ビニウーやボンバルドといった伝統楽器を、消滅の危機から救ったのです。会の結成を呼びかけたポリク・モンジャレは、伝承されてきた楽曲を集めて、1984年に『トニウー・ブレイス・イゼル』(*Toniou Breizh Izel*)を出版しました。この曲集には、バス・ブルターニュで収集された2,000ものメロディーがまとめられています。

ポリク・モンジャレのアイデアがすばらしいのは、スコットランドの「パイプ・バンド」をモデルに、ブルターニュの音楽家たちを集めて楽隊を編成したことです。こうしたバンドはブルターニュでは「バガド」(bagad、複数形では

バガドゥ (bagadou) と呼ばれています。スコットランドの「パイプ・バンド」には、バグパイプと太鼓が参加していますが、ブルトン人はそこにブルターニュ独自の楽器であるボンバルドを加えました。こうして出来上がった楽団は、若者のあいだで一大ブームを巻き起こします。2010年には、ボダデク・アル・ソネリオンに加入しているのは114楽団、音楽家の数は8,000人にのぼっています。

今日では、ごく小さな村でもバガドが編成され、まさに民衆音楽を伝える学校になっています。これはまさに社会現象と言ってもいいでしょう。ボダデク・アル・ソネリオンは、ブラジルにおけるサンバ学校と同じような役割を果たしているのです。

ブルターニュのダンスと二大連盟「ケンダルフ」(Kendalc'h、「維持する」の意)と「ワルル・ルール」(War'rl Leur、「ダンス曲について」の意)

バガド以外にも、特に伝統的なブルターニュのダンスを実践することで知られるケルト・サークルと呼ばれるグループが存在します。ケルト・サークルというのは、なによりもまず、ブルターニュの文化の継承を目的として設立された、広く文化全般を対象とするグループでした。例えば、ブルターニュの中心都市であるレンヌ市のケルト・サークルは、1932年に創設されましたが、その目的は「郷土の精神の復興、その言語と文化の承認、郷土色の維持保存に賛同するブルトン人を結集する」ことでした。

「ケンダルフ」連盟は1950年、レジスタンス運動家であったひとりのブルトン人議員によって、設立されました。その目的は、ケルト・サークルとブルターニュの文化運動をひとつにまとめることにありました。今日では、161のダンスとコーラスのグループが参加し、会員数は1万3,000人以上にのぼります。もうひとつの連盟はワルル・ルールで、1万人の会員がいます。

ワルル・ルールの参加グループは、過去のフォークロア・ダンスを再現することのみならず、民族衣装の刺繍の技術を保存するなど、さまざまな取り組みを行っています。なかでも特筆に価するのが、斬新な振り付けの現代的なショーや、「ウェスト・サイド・ストーリー」のようなミュージカル仕立ての演目を創作したことで、そこでは映画、ビデオ、歌などのあらゆる技術が用いられ、新しい民族衣装の製作も行われています。

連盟に加入しているグループは皆、毎年コンクールに参加し、そこで優勝すべく腕を競い合っているのです。

「ディワン」とブルターニュ語の保存運動

ブルターニュの言語を守ろうという民衆レベルの動きが現れるのは、文化運動に比べて一世代遅れました。というのは、まずブルターニュ語は第二次世界大戦まで実際に使われていたので、その権利要求にかかわったのは知識階級の人々だったからです。ブルターニュ語を話すことは学校では禁止され、行政や司法の場からも閉め出されたため、人々は社会的活動のツールとしてフランス語の使用を余儀なくされました。そのため、ブルターニュ語を話していた人々の多くは、戦後、子どもたちにブルターニュ語を伝えるのをやめてしまったのです。

この状態は1970年代まで続き、母語としてのブルターニュ語を奪われた世代が立ち上がったのは、ようやく1977年のことでした。この年、ブルターニュ語で「芽、きざし」を意味する「ディワン」という組織が生まれたのですが、目的はブルターニュ語とフランス語のバイリンガルの学校を設立し、教育と社会生活の場にブルターニュ語の使用範囲を広げることでした。続いて、公立学校とカトリック系の私立学校でも、フランス語とブルターニュ語のバイリンガル教育が実施されるようになったのです。昨年度2010年の統計を見ますと、1万3,000人以上の生徒がバイリンガル教育を受けています。政府はこうした教育に積極的ではありませんが、その数は増え続けています。

ブルターニュ東部のオート・ブルターニュでは、フランス語に類似した、ロマンス語系の言語であるガロ語が使われていましたが、いまではこのガロ語に関しても、ブルターニュ語と同様に地域語復興運動が生まれています。

「ふるさと協定」もしくは地域連盟

次にご紹介するのは「エムグレオ・ブロ」(Emglev Bro、「ふるさと協定」の意)という組織ですが、これは町や農村地帯で、その土地に根付いた活動をしている組織です。多くは「ティー・アル・ブロ」(「ふるさと館」というブルターニュ文化に関する録音や映像を集めたマルチメディア資料センターを運営しており、ブルターニュ語で「収集する」を意味する「ダステム」(Dastum)

という団体の協力を得ているのですが、この「ダステュム」はブルターニュの口頭伝承や音楽などを収集していて、一般人やアーティストが利用できるように公開しています。

なおエムグレオ・プロの会員は約5万人です。

3) 注目すべき民衆的表現の発展

ここで現在のブルターニュの文化振興の上で大きな役割を果たし、この土地をますます魅力的なものにしている、幾つかの活動をご紹介します。その多くはボランティアによって運営されています。まずは、フェスト・ノースです。

フェスト・ノース (Fest noz)

音楽に合わせて大勢で手をつないでダンスを踊る「フェスト・ノース」は、ブルターニュ語で「夜祭り」の意味ですが、いまや世代を超えたブルターニュを代表する文化のひとつになりました。現在、ユネスコの無形文化遺産の登録に向けて、審査が行われています。

このフェスト・ノースは、もともとブルターニュ内陸部の農村地帯でのみ行われていたものでした。それは農作業が終わった後とか、結婚式の食事の後などにやるものだったのです。そこで音楽を担当したのは、もっぱら「カン・ア・ディスク」(Kan ha Diskan、「歌と返し歌」と呼ばれるこの地方独特の民謡の歌い手でした。この歌は、ふつう二人で代わる代わる歌うのですが、そこには規則があります。歌い手たちはまず仲間と同じ音で声を合わせて歌ったのち、今度は一人ずつソロで歌います。そのとき、相手が歌い終えたフレーズの最後の音と同じ音で歌い始めなければならないのです。

今日フェスト・ノースは、まさに社会現象になっていて、生活のなかに完全に溶け込み、農村だけでなく都市でも行われています。さまざまなスポーツ団体、アムネスティのような国際的な人権団体は、毎年、自分たちのフェスト・ノースを開催していますし、レンヌで開催されるブルターニュ音楽のフェスティバル「ヨワンク」(Yaouank、「若者」の意)は毎年、7,000から8,000人が参加する巨大なフェスト・ノースを催しています。また1999年以降、毎年開

催されている「サイバー・フェスト・ノース」には、世界各地のインターネット利用者から、数万というアクセスがあります。いまや、あらゆるグループが、いろいろな楽器やスタイルでそこに参加しているのです。フェスト・ノースは、老いも若きも、あらゆる年代の人々がこぞって楽しむ祭りだといえるでしょう。

アーティストたち

このフェスト・ノースのブームがきっかけになって、ブルターニュでは1970年代にたくさんのアーティストや歌手や音楽家が現れました。

なかでも最も有名なのがアラン・スティーヴェルです。彼はケルティック・ハープを片手にブルターニュ音楽に新風を吹き込みました。1972年には、パリの名門劇場であるオランピア劇場にも出演しました。アルバムは150万枚を売り上げ、音楽の世界において、世界にあまたある文化のひとつ、民族のひとつとしてブルターニュを知らしめたのです。

一方、それまで農村のみで歌っていたフェスト・ノースの伝統的な歌い手は、「スター」になりました。たとえばゴアデック姉妹は、1973年にパリのミュージック・ホールの殿堂であるボビノに登場しました。「カン・ア・ディスカン」の歌い手であるモルヴァン兄弟は、5万人の観客を前に「古い犁祭り」(Festival des Vieilles Charrues) に出演し、新世代のミュージシャン「タンブル・デュ・ブロンクス」と共演しました。さらに若い世代では、デネス・プリジャンがいます。彼はブルターニュの伝統的な民謡である「グウェルス」を現代風にアレンジして、レンヌのロック・フェスティバル「トランスミュージカル」に彗星のように登場しました。

ロック・ミュージシャンのダン・アル・プラスもいます。彼はカンペールのバグパイプ・バンド「バガド・ケンペール」や、さまざまなケルト地域のアーティストたちと「ケルトの遺産」というコンサートを行い、大変な人気を博しました。このバガド・ケンペールは、ブルターニュでもっとも優秀な楽団で、ジョニー・クレッグ、ズルー・ブランと共演しています。ブルターニュ音楽はどんなジャンルの音楽ともよくマッチします。それはセネガル人のユッスー・ンドゥールの音楽を聞けばよくわかるでしょう。そう、作家で作曲家、それに歌手でもあるノルウェン・コルベルのような人もいます。彼女は並外れた才能を持ち、時代の要請に応える新世代のクリエイターです。

ブルターニュはフェスティバルの地

次にフェスティバルの話をしていきましょう。ブルターニュでは、年間300ものフェスティバルが開催されています。よく言われるように、まさに「フェスティバルの地」です。

祭りやフェスティバルは、ブルターニュ文化への資金源でもありましたが、それはなによりもまず、ブルターニュの民衆文化の一つの表現です。それは人々の連帯的な活動によって開催されており、芸能プロモーターや国の機関によって組織されているわけではありません。

カンペールで行われるコルヌアイユ・フェスティバルと ロリアンのインターケルティック・フェスティバル

この二つのフェスティバルは、世界的に有名なイベントです。二つともほぼ10日間にわたって、町をあげて盛大に催されます。コルヌアイユ・フェスティバルは7月末に、インターケルティック・フェスティバルは8月初めに開催され、2010年のコルヌアイユ・フェスティバルには23万人が、この年ブルターニュを特集したインターケルティック・フェスティバルにはロリアンに80万人もの人々が集まりました。どちらのフェスティバルでも、何千人もの音楽家たち、「バガド」や「パイプ・バンド」、そして、地域によって異なるさまざまな民族衣装に身を包んだ踊り手たちが、町中を行進するのです。さらに数々の新しいショーや、電子楽器を交えたコンサート、路上で演じられる野外劇なども意欲的に発表されています。こうしたフェスティバルは、アマチュアやプロのアーティスト、あるいはプロを目指す地方のアーティストにとって、自分をアピールする格好の機会になっています。特に、それまでなかなか表舞台に登場できず、自己表現の場を持てなかったために名前を知られずにいたアーティストにとっては、まさに絶好のチャンスです。他の祭りもそうですが、この二つのフェスティバルは、それが開催される町のみならず、広くブルターニュ全体に多くの観光客を引きつける重要な役割を果たしています。このフェスティバルの開催費用の三分の一は、地方自治体とブルターニュ地方議会からの助成金、もう三分の一が企業の後援やメセナ活動、残りの三分の一が切符やさまざまな関連グッズの売上金で賄われています。しかしながら、フランス各地で開

催されるほかのフェスティバルとは異なり、文科省から支給される国の援助は、ごくわずかです。ですから、住民のボランティアによる参加が、なくてはならない要素となっています。

「地方経済社会研究所」が行った調査では、次のように強調されています。

「ブルターニュのフェスティバルは、社会統合の重要なベクトルである。それは、ブルターニュにおける組合組織の緊密な連帯と大いに関係がある。ブルターニュのバイタリティと住民の行事への積極的な参加は、まさにそれゆえなのである」。

4) クレイス・ブレイス (Kreiz Breizh、ブルターニュ中央西部)

次にクレイス・ブレイスについて話しましょう。

ある種の「地域」として、「文化」とはその包括的な発展のための重要な要素です。カレという人口8,000人に満たない小さな町の周辺地域クレイス・ブレイスが、その好例です。クレイス・ブレイス、すなわちブルターニュ語でブルターニュ中央西部を意味するこの地域は、農業が主要産業で、ブルターニュで最も人口密度の低いところ（1平方キロメートルあたり45人）。高齢化が進んで、若者は村を出て行き、経済活動やサービスは縮小の一途を辿りました。

しかしながら、ブルターニュ中央部の若者たちの連帯の動きは、こうした運命を唯々諾々と受け入れることを潔しとしませんでした。

1986年、ブルターニュならびにケルト諸地域に関する書籍とDVDの出版を専門とする「コーペラティヴ・ブレイス」が、カレ近郊に進出します。

1992年には、沿岸に古い船を集める、「古船祭り」に対抗して、若者の小さなグループが友人を誘って、「古い犁祭り」という小さなフェスティバルを始めました。このフェスティバルは、いまではフランスばかりではなく、ヨーロッパでもっとも重要な祭りのひとつになっています。2010年には、4日間の開催期間中、24万2,000人の有料入場者を数え、5,000人のボランティアが祭りを支えました。運営費はもっぱら地元の企業に頼っており、ほかの多くのフェスティバルと違って、国からの助成金はほとんどもらっていません。この祭りの利益は、ブルターニュ中央部の文化的連帯組織の発展に使われています。

例えば、劇場の運営資金や、カレのディワン高校の建設資金などにです。

ディワン学校協会は、1994年、ブルターニュ語を含む多言語教育を行う初めての高校を開設するために、入札を実施しました。それに応じたのがカレ市役所で、いくつかの大都市を抑えて受注に成功しました。高校業務を担当する地方議会が、カレに新しい校舎を建設しました。

そのほか、コマナのディワン小学校は、毎年、近郊の山でハイキングを企画し、数多くの方が有料でそれに参加しています。人々はすばらしい景色のなかでハイキングを楽しみ、さまざまな順路を巡りながら、この地方の遺跡と出会うことができます。一方で、参加者が支払うお金は、学校の一年間の運営費として使われるのです。

1990年、カレのまた別の協会がイニシアティブをとって、毎年ブルターニュでブック・フェスティバルが開催されるようになりました。このフェスティバルには、何百人もの作家と出版社が参加し、ブルターニュ内外から何千人もの人が訪れるので、書籍の売り上げも好調で、いまでは欠かせないイベントになっています。フランス語やブルターニュ語による討論会が催されたり、文学賞が創設されるなど、このフェスティバルはますます興味深く、また魅力あるものになってきています。

さらに1999年、ブルターニュ語事務局の新しいオフィスが、カレに開設されました。

活気づいた町に惹かれるようにして、マクドナルド、ブラスリー、医薬品流通会社がカレに進出しました。ひとつ良いことが生まれると、連鎖反応のように次々と良いことが生まれたのです。

2009年に、医療を合理化し、大規模医療センターの機能を強化するため、国が地域の病院を閉鎖することを決めたときも、住民全体が立ち上がりました。市長を先頭に、何週間にもわたって、毎日抗議運動を展開し、ついに裁判所で決定の無効をとりつけたのです。

ふるさとを誇りに思う気持ちは、人々のあいだに次々と波及し、このブルターニュ中央部で、大掛かりな計画が誕生しました。それは、ある小さな村のそばに、「聖人たちの谷」をつくろう、というものです。そこに、「ブルターニュの礎をきずいた聖人たち」、つまりブルターニュの起源となった神話的人物を記念する像を1,000体つくるのです。すでに、御影石でできた「自分の」

守護聖人の彫像を購入するための申し込みが始まっています。2010年には、7体か8体の彫像が置かれたのですが、それまで過疎地域だった「聖人たちの谷」は、すでに観光名所となりつつあり、新しいレストランのオープンも予定されています。

IV. 部分的な認知と不安

ブルターニュ文化憲章：

国による最初のブルターニュの文化的アイデンティティの認知

このようなブルターニュ文化の目覚ましい発展が、戦わずしてすんなり得られたと思ったら、大きな間違いです。1970年代、ブルターニュ文化を認知させるために、さまざまな運動が行われました。このとき、ブルトン人と国の関係にとって、ひとつの重要な出来事が起こりました。それが、1977年、フランス共和国大統領ヴァレリー・ジスカル・デスタンが合意した、「ブルターニュ文化憲章」です。ジスカル・デスタン大統領は、ブルターニュを数日間訪れた際、1,000人のバガドのプレイヤーの歓迎を受けたいと考えました。しかし、彼らはこれを拒否したのです。国が頑なに、ブルターニュ独自の文化を認めようとせず、言語に関して「文化的大虐殺」ともいえる政治姿勢を執ってきたことへの、怒りの表明でした。

そこで、国とのあいだで「文化憲章」の締結交渉が行われることになりました。この憲章の正確な名称は、「ブルターニュの文化的個性を承認するための証書、ならびにその自由な発展を保障するための約束」です。

1982年の地方分権化法によって生まれた真の意味での文化的活力

さらに1981年、社会党を率いるフランソワ・ミッテランが大統領選挙で勝利し、地方分権改革が実施されました。これによって、ブルターニュ文化への支援がいつそう強化されるという期待が高まりました。

1986年、地方議会の議員が、初めて普通選挙によって選ばれました。それにより、県議会議長と地方議会議長が、パリの中央政府が任命する知事に代

わって行政権を持つようになりました。

議員たちは、ブルターニュ独自の言語と文化の発展、そして若者の育成を支援するために新しい民主的な手段を手に入れたのです。

地域の民衆文化に非好意的な中央集権の回帰

とはいえ、実際に獲得されたものは、まだ何もありません。ブルターニュの民衆文化は、国からは実質的に何の援助も受けておらず、国は一方的な取り決めによって地方自治体の文化政策をコントロールしています。

ラジオ、テレビなど視聴覚メディアも、やはり国によって一元化され、コントロールされています。国営テレビ局「フランス3」は、「地域のテレビ」を標榜しながら、地方向けの番組は1日に1時間しか流しておりません。フランス周辺のヨーロッパの大国には、地方レベルのテレビ局があるのに、フランスにはそれがないのです。2000年には、地域の民放テレビ「TVブレイス」を開設する試みがなされましたが、高等視聴覚評議会が放映のためのすべての申請を却下したので、実現には至りませんでした。今日では、ブルターニュのローカル・テレビ局3社が、ともに地域に向けた番組の放送を始めています。

現在行われている地方自治体の改革は、地方自治体の独立性と地域の役割を縮小するものです。このような中央政府による統制の強化は、将来に懸念を抱かせます。

(訳：後平澗子)